

山岡 敬和 提出 学位申請論文

『説話文学の方法』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本申請論文は、語られていた説話が、どのようにして説話集という書物の形に収録されたかについて、その〈方法〉を論ずるものである。

すなわち、本論文が問題とする〈方法〉とは、説話は一話として存在し語られており、発生段階で保持していたコンテキストなしでは自立し得なかったものが、文字化され集成としての形態を取り込むことにより、各説話に内在している語り手と、説話集としての新たな語り手とが、相互に語り合うことで進められるという、新たに生まれた〈方法〉をいう。

その〈方法〉を確認するために、本論文は『宇治拾遺物語』と『古今著聞集』

を中心に、『今昔物語集』『伊勢物語』などを主な対象にして、序と、以下の三部（十四章と付録）によって構成され、初出一覧と索引が付されている。

第一部「『宇治拾遺物語』の方法」（五章と付録）

第二部「『古今著聞集』の方法」（三章）

第三部「各説話の方法」（六章）

第一部「『宇治拾遺物語』の方法」では、第一章「序文の考察―宇治を巡る夢想―」、第二章「冒頭語の考察―「これも今は昔」を中心として―」、付録「『宇治拾遺物語』成立試論」、第三章「《歩く》ものたちの《物語》」、第四章「《境界》としての読書」、第五章「エピファニー、あるいは愚行の構図」など五本の論考と付録を通して、類聚・雑纂形態の収録方法によって集成されている『宇治拾遺物語』について論究している。

第一章「序文の考察―宇治を巡る夢想―」では、『宇治拾遺物語』の序文が意図的にあいまいな表現に終始している点に着目し、その原因を解き明かすことで

『宇治拾遺物語』作者の方法を論じる。すなわち、序文は宇治大納言隆国が編纂したと伝える幻の説話集『宇治大納言物語』については詳述するが、『宇治拾遺物語』については語っていないことから、作者は自らを『宇治大納言物語』の陰に位置付けることで、『宇治拾遺物語』を自由に読むことの可能性を読者に用意していると説く。

第二章「冒頭語の考察——『これも今は昔』を中心として——」では、『今昔物語集』などと異なり、『宇治拾遺物語』の冒頭語は「昔」「今は昔」「これも今は昔」と一定していないことに着目して、冒頭語が説話内の時間、および説話の典故との関係や伝承経路・採録時など、様々な要因と関わり合うことを確認し、冒頭語と説話内容とがどのように連動しているかを、「これも今は昔」の冒頭語を持つ説話を中心に考察する。その結果、「これも今は昔」の冒頭語を持つものは《笑いの説話》であり、それ以外の冒頭語を持つ《涙の説話》と対置されていることを明らかにする。そして、そのように至った理由として、『宇治拾遺物語』作者

の前に、人の生き死にに直結する《涙の説話》が一定のまとまりをもって存在しており、その説話群には笑いを中心とした滑稽な説話が欠けていることから、作者は自らの身边に新たに笑話を求めて、それに「これも今は昔」との冒頭語を冠して補入した可能性を想定する。

付録「『宇治拾遺物語』 成立試論」では、『宇治拾遺物語』百九十七話のうち、同類話を持たない五十四話を取り上げて、冒頭語との関連を精査した結果、「これも今は昔」で始まる話は、それ以外の「昔」「今は昔」で始まるものとは時代的・内容的に明かな差異があり、そのほとんどが藤原忠通の周辺の《笑いの場》を經由して『宇治拾遺物語』へと至ったものであることを明らかにする。

第三章「《歩く》ものたちの《物語》」では、『宇治拾遺物語』の終り近くの第一八六話と、第一八七話とに連続する流離譚は、前者は壬申の乱（七六二年）で美濃国に流離した天武天皇の貴種流離であり、後者は前九年の役（一〇五一〜六二年）に胡国へ流離した安倍頼時の賤種流離であるが、それらの流離譚を初め

『宇治拾遺物語』に次々と現れる《歩く》ものに注目することで、その行為の意味するところを論ずる。特に作品内に第九〇話・第一五二話・第一九七話の三話に渡って登場する孔子に着目することで、『宇治拾遺物語』を読む行為は、登場人物の《歩く》過程と重なっていき、〈中心／周縁、聖／穢、賢／愚〉といった対立する二項目の境界が創り出され、その位相の上に立って、読者自らが『宇治拾遺物語』内部を《歩く》異人となることで、『宇治拾遺物語』の読みは達成されることを説く。

第四章「《境界》としての読書」では、『宇治拾遺物語』における政権説話を読み解く視点として、『光』と『影』の構図の境界にある『陰』の位相の存在を認め、認めた上で、その『陰』の位相に身をおくことで、『誰のものでもない物語』としての説話の特性が活かされていること、そしてその位相に立った読者は、多様な『読み』の世界を紡ぎ出すことが可能になることを論ずる。

第五章「エピファニー、あるいは愚行の構図」では、『宇治拾遺物語』第一三

○話「蔵人得業猿沢の池の龍の事」に焦点を絞り、この説話に取材した芥川龍之介の小説『龍』との比較で、二作品の構造を明らかにする。すなわち、第一三〇話の主人公恵印は「鼻蔵」と馬鹿にされる日常の転覆を図って、龍が昇天するという偽り出現（エピファニー）の立て札を建てるが、その嘘に自らが騙されるといふ愚行を演じることで、人々に非日常的体験と爆笑をもたらし、社会を活性化させてゆく《道化》となることを指摘する。一方、芥川が描く恵印は、エピファニーへの不信仰を払拭できないままに龍を昇天させる。その結果、芥川自身も作品に対する十全な支配者となれず、自らが犯した愚行を前に疎外感を強めることになってしていると説く。

第二部「『古今著聞集』の方法」では、第一章「『古今著聞集』の世界」、第二章「橘成季の方法 その①」、第三章「橘成季の方法 その②」などを通して、類聚・分類形態の収録方法によって集成されている『古今著聞集』の特質について論究している。

第一章「『古今著聞集』の世界」では、『古今著聞集』の序文・跋文の考察から、『古今著聞集』の作者橘成季は、「神国」としての日本の説話の集成を目指しつつ、喪失の危機に瀕した《道・芸・遊》を中心に、〈聖と俗、善と悪、正と愚〉などの対立する二項目を合わせもった世界の全体像の再現を、神国思想のもとに視覚化・秩序化することで達成したと説く。

第二章「橘成季の方法 その①」では、序文・跋文の内容と、『十訓抄』『三宝絵詞』の序文、及び『源氏物語』螢の巻の物語論との比較を通して、作者の橘成季が、史実の《物語》化、あるいは《物語》の史実化を目指していることを明らかにした上で、「昔」から「今」にかけての申し伝えや記録を、再び年代順に文字化する営みの中で創られた世界における、過去と現在の懸隔、史実と《物語》との相反など、自らの方法の破綻を埋めていこうとする試みが、序文・跋文、および各話から抽出される『古今著聞集』作者橘成季の方法であることを論ずる。

第三章「橘成季の方法 その②」では、前章の考察を受けて、叙述するべき事

と自らの置かれた現実との距離の実感を埋めることばの一つとして、作中の語句「興あることなり」に着目する。そして、「興あることなり」と自らの感想を語る場合にこそ、説話内容の面白さや趣を表現すると同時に、説話の世界に同化・没入してゆく作者の姿をも象徴的に表現されており、それが『古今著聞集』の作者橘成季の方法であることを明らかにする。

第三部「各説話の方法」には、第一章「真福田丸説話の考察 その①―発生について―」、第二章「真福田丸説話の考察 その②―伝播について―」、第三章「龍田山説話の考察 その①―『古今和歌集』の場合―」、第四章「龍田山説話の考察 その②―『伊勢物語』・『大和物語』の場合―」、第五章「隣の翁説話の考察」、第六章「歌徳説話の考察」などを通して、一つの説話がどのように発生し、伝播してゆくのかについて論じる。

第一章「真福田丸説話の考察 その①―発生について―」では、『真福田丸説話』において少年の時に真福田丸と呼ばれ、後に元興寺の僧となった智光と、行



基菩薩との関わりを語るこの説話について、『今昔物語集』と『古来風躰抄』との伝承の相違に着目し、昔話の山田白滝譚との関連や、智光が行基を誇る《智光墮地獄説話》や、智光が曼荼羅を写して往生する《智光曼荼羅説話》との関連を検証した結果、《真福田丸説話》が難題智譚を根源に据えて、行基と智光の姿をそこに投影させることで発生した説話であることを説く。

第二章「真福田丸説話の考察 その②―伝播について―」では、前章を受けて、『古来風躰抄』が有する真福田丸説話の発生の姿を留めた第一次形態から変化した、第二次形態として一応の完成した姿を見せている『古本説話集』所収《真福田丸説話》を取り上げ、真福田丸が芹を摘んでいる場面に着目して、「芹摘みし昔の人」という和歌や、芹摘みの物語と関連していることを確認するとともに、智光が往生した後に、行基が登場してくる理由を《智光曼荼羅説話》との関係に求めることで《真福田丸説話》の伝播について述べ、浄土教信仰で祖師的役割を果たした智光の姿を示すものであることを論じる。

第三章「龍田山説話の考察 その①——『古今和歌集』の場合——」では、『古今和歌集』第九九四番歌「風ふけば沖つしら波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ」を取り上げ、その左注に、男は大和の国に住む本の妻の経済的理由により、河内の国に新しい妻を設けたが、本の妻は「つらげなる気色も見えで、……夜更（く）るまで琴をかき鳴らしつゝ、うち嘆きて、この歌を詠みて寝にければ」という妻の姿を垣間見て、「いとあはれなりと思ひ」、彼女のもとへと戻ったという説話について、この説話で男が本妻の許に戻った理由を、古代の琴の呪的機能に認め、かつ龍田山の境界としての位相に求めるべきことを説く。

第四章「龍田山説話の考察 その②——『伊勢物語』・『大和物語』の場合——」では、前章での考察を受けて、類話を載せる『伊勢物語』二三段と『大和物語』一四九段とを考察し、『伊勢物語』では本の妻の行為が、『古今和歌集』での弾琴から化粧へと変わるとともに、新しい妻が登場して自ら飯を器に盛る。その二人の行為の対比から、『男』の愛の特質について論じる。一方『大和物語』での嫉妬

心で水を沸騰させるといふ本の妻の行為の意味を、説話的方法であると捉える。

第五章「隣の翁説話の考察」では、『宇治拾遺物語』が記す「瘤取り」と「腰折れ雀」には、〈隣の翁、隣の媪〉が登場するが、なぜ彼らが描かれる必要があるのかについて究明し、『異類歓待』譚を想定する。つまり、神が人に化身して現れる『異人歓待』譚に対して、人以外の異類と何らかの形で関係し、あるいは歓待することで幸運を手に入れる『異類歓待』譚ということであり、元の異人歓待の痕跡として〈隣の翁、隣の媪〉が登場することについて論じる。

第六章「歌徳説話の考察」では、和歌を詠むことで利益を得る歌徳説話について説く。まず、『俊頼髓脳』が記す「老いはてて雪の山をばいただけどもと見るにぞ身は冷えにける」の和歌を詠む老郡司の説話を手がかりに、歌中の「しもと（〈答〉と〈霜と〉）」の掛詞から最初の歌徳説話が発生したことを明らかにする。続いて赤染衛門や能因法師などの歌人の個人的体験が元となって歌徳説話が発生した姿を捉え、さまざまな徳にまつわる説話を収める『十訓抄』が、歌徳説

話の発生にも大きく関わっていることを究明する。

### 論文審査の結果の要旨

本申請論文は、一話ずつ存在していた説話が、説話集として文字化され収録されていく上で生じた〈方法〉について究明するものである。すなわち、発生段階の説話に内在している語り手と、説話集へと形を変えたことで生じた語り手が、相互に語り合うことで展開される、新たに生まれた〈方法〉であり、それを確認するために、『宇治拾遺物語』と『古今著聞集』を中心に据えて論じている。

第一部「『宇治拾遺物語』の方法」では、鎌倉初期に類聚・雑纂形態の収録方法によって集成された説話集『宇治拾遺物語』は、「昔／今は昔／これも今は昔」などの冒頭語により、現実から自律した物語空間の中で語られる本来の口承説話の形をそのまま活かして作品化されたことで生じる特徴的な方法を明らかにしよ

うとする。その中で、第二章「冒頭語の考察——「これも今は昔」を中心として——」と、第三章「《歩く》ものたちの《物語》」が注目された。

第二章では、『宇治拾遺物語』の冒頭語が説話の出典・伝承経路・採録時などの要因と連動していること、その中で冒頭語「これも今は昔」を持つものは《笑いの説話》であり、それ以外の冒頭語を持つ《涙の説話》と対置されていることを確認した上で、すでに人の生死に関わる《涙の説話》が存在しており、そこには笑いを中心とした滑稽な説話が欠けていることから、作者が新たな笑話を求めて「これも今は昔」との冒頭語を冠して補入した可能性を想定する。説話集として集成化される上で生じた新たな〈方法〉の発見であり評価できる。

第三章「《歩く》ものたちの《物語》」では、集成化されたことで『宇治拾遺物語』に次々現れる天武天皇の貴種流離、安倍頼時の賤種流離、および孔子などの《歩く》ものたちによって、〈中心／周縁、聖／穢、賢／愚〉という対立する二項目の境界が作り出され、その位相に立つことによって、読者も作品内部を《歩

く》異人となることで、新たな読みが達成されるのであり、それは説話文学が新たに獲得した〈方法〉であるとする見解は首肯できる。

第二部「『古今著聞集』の方法」では、鎌倉中期の『古今著聞集』を取り上げ、『宇治拾遺物語』とは異なり、類聚・分類形態の収録方法により、歴史的年代を示す冒頭語で始めることで、口承説話本来の形は破壊されて、歴史書という別の価値が付加されることで生じた〈方法〉について論じる。その中で、第二章「橘成季の方法 その①」と、第三章「橘成季の方法 その②」が注目される。

第二章では、作者の橘成季が、集成化するに際して、史実の《物語》化、あるいは《物語》の史実化を目指したために生じた、史実と《物語》との相反、過去と現在との懸隔などの破綻を埋めようとする〈方法〉の試みが、序文・跋文の存在であり、各話の内容から抽出される「おぼつかなし」などのことばに認められるとする。続く第三章では、叙述内容と自らが居る現実との距離の実感を埋める表現として「興あることなり」に注目し、説話への興味を示すとともに、説話の

世界に同化・没入しようとする作者の姿勢をも表していると説く。『古今著聞集』として集成化されたことで、口承説話本来の形が破壊され、新たに生じた〈方法〉を究明したものとして評価できる。

第三部「各説話の方法」では、真福田丸・龍田山・隣の翁および歌徳説話などを通して、説話がどのように発生し、伝播してゆくかについて論じている。その中で、第一章「真福田丸説話の考察 その①―発生について―」と、第二章「真福田丸説話の考察 その②―伝播について―」が注目された。

第一章では、真福田丸が後に元興寺の僧智光となる説話を、『今昔物語集』と『古来風躰抄』との伝承の相違に着目するなど、詳細な検討を経た上で、『真福田丸説話』が難題聳譚を根源に据えて、行基菩薩と智光との姿を投影させることで発生した説話であるとの究明は評価できる。さらに第二章では、『古本説話集』所収の『真福田丸説話』を取り上げ、芹摘みの和歌・物語との関連から、浄土教信仰で祖師的役割を果たした智光の姿を示すもので、『真福田丸説話』の第二次

形態へと伝播した完成形の一つであるとする論述は創見に富み首肯できる。

以上のように、本申請論文の意義は、一九八〇年代に大きく変転する説話文学研究の動きに応じて、〈説話文学の方法〉という視点から、新しいテキスト論の方向性を拓こうとしたものとして評価できる。個別の説話論も独自の方法を駆使して、一定の成果を上げている。ただし、「説話文学」の内実とその〈方法〉についてはまだ説明が十分とは言えないこと、総論としてのまとめや、第三部に及ぶ論の体系化が弱いこと、より実証的な分析に基づく今日の説話研究の動向を取り込むべきであること、江戸期の享受史や再生論からの追求も必要であるなど、いずれも容易ではないが、今後の課題として残されている。だが、各論考についてはいずれも一定の水準に達しており、随所に今後の研究のさらなる進展を期待させるものがある。

よって、本論文の提出者山岡敬和は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があると認められる。



平成二十七年三月十日

主查 國學院大學教授 豊島秀範 ①

副查 國學院大學教授 辰巳正明 ①

副查 立教大學名譽教授 小峯和明 ①

副查 国文学研究資料館助教 恋田知子 ①

山岡 敬和 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十六年十一月十八日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	豊島秀範	印
副査	國學院大學教授	辰巳正明	印
副査	立教大学名誉教授	小峯和明	印
副査	国文学研究資料館助教	恋田知子	印